



通夜・告別式 通夜5月23日 告別式5月24日 場所:吉田葬祭典礼会館



山崎拓 元副総裁



石原伸晃 元幹事長

保岡 興治 送る会

《東京会場》

5月30日 場所:ザ・キャピトルホテル東急



天皇陛下より祭楽料・旭日大綬章・正三位

《奄美会場》

6月9日 場所:名瀬小学校体育館



実行委員長・金子万寿夫衆議院議員



安倍晋三 内閣総理大臣・自由民主党総裁



森山裕 鹿児島県連会長



大島理森 衆議院議長



増田寛也 元総務大臣



安倍 晋三

内閣総理大臣・自由民主党総裁

追悼の辞

正三位旭日大綬章、故保岡興治元衆議院議員の逝去を悼み、謹んで哀悼の誠を捧げます。
保岡先生、先生と熱き憲法議論を重ねた日々は、ついでにこのことです。
平成の世から令和へという時代の節目に、先生の突然の訃報を知り、まさかひとつの時代が終わり、告げられたと思つたのは、私だけでしうか。
新しい令和の時代、これからの日本のあるべき姿、憲法について国民的議論を積み重ねていくという大事な時に、先生を失つてしまった悲しみは、言葉では言い尽くせません。
本日に、本当に、残念でなまねないところ、光をあてる。この言葉を政治の原点とし、昭和四十七年の衆議院議員総選挙で、先生は当時の奄美群島選挙区から初当選されました。
以来、奄美、鹿児島との振興に全力で取り組んでこられました。
まず直ちに取組まれたのは、当時の奄美の生命線であったサトウキビの買取価格の増額でした。
そして、港湾の整備、奄美と徳之島のジェット空港の実現、大島紬や川辺仏壇、薩摩焼などの伝統文化を大切に伝える伝統工芸品、産業振興法の実現など、ご地元島の発展の礎を築いてこられました。
その郷土への愛情と使命感には、本当に頭が下がる思いでありました。
本年2月、ご地元で旭日大綬章受賞祝賀会が行われた時には、「議員は辞めたが政治家は辞めていない。これからは奄美の振興のために皆さんと一緒に頑張っていきたい。」この決意を新たになさっていたと語ります。
先生の「遺志をわれわれは決して忘れることなく、わが国とご地元の発展に全力を尽くしてまいります。寝食を忘れ、ご地元のために奔走されながら、保岡先生は、日本と世界を俯瞰する深遠なご見識を持ち、時代の変化に迅速的確に対応できる新しい日本の政治の基盤を構築する。」この強い信念の下、裁判官、弁護士としてご活躍された経験を生かして、政治改革に情熱を注がれました。
小選挙区制の導入、裁判官制度の導入や法科大学院の創設、政治、司法の大改革を力強く推し進めてこられました。そして、先生は、立憲以来の党首である憲法改正に誰よりも熱く、真正面から果敢に取り組み、国民投票法制の制定、投票年齢の18歳への引き下げの実現をけん引されました。
憲法改正推進本部長の任にあつては、党内の議論をまとめ上げ、具体的な条文、イメーシの策定を主導し、国民的議論を喚起しながら、一歩一歩、着実に前進してまいりました。
一昨年、政界を引退された後、体調が思わしくない日もあったと伺っておりましたが、まだまだ先生と憲法改正に向けて一緒に取り組んでいくことができる、議論を重ねていくことができると私は信じ、先生の益々のご活躍を誰もが信じておりました。優しく微笑みながら、理路整然と語るお姿が、未だなお、まぶたにしっかりと焼きついておりしつかりと覚えています。
言葉の端々から溢れ出る改革への情熱、われわれは決して忘れることはありません。先生の熱き想いを胸に、自民党は、幅広い合力を得られるよう最大限の努力を重ね、改革議論をしっかりと進めていくことをお誓いいたします。
おじくりになる直前まで今後の日本のあるべき姿を語り、政治家としてその人生を全うされた先生は、眠るような穏やかな表情だったと伺いました。政治に全身全霊を捧げた保岡先生の御遺影を仰ぎ見、どうも先生への安らかならんとことを心から願ひ、お別れの言葉と致します。
天上からこの国の行く末と最愛の奥さま、御家族をお見守りください。
令和元年五月三十日
内閣総理大臣
自由民主党総裁
安倍晋三

式辞

戦が繰り返されていきました。そうした特殊な政治環境を原体験とした先生は、政治家人生の大半を政治改革に懸けられました。
時は昭和の時代、相次ぐ政治とカネのスキヤンダルが政治の混乱と停滞を招く中から変えるような抜本的な改革が必要だと、志を同じうする仲間とともに行動を起されました。なかでも、特に先生が心血を注がれた小選挙区制度の導入を始めとする政治改革関連法をめぐっては、党内にも多くの反対派を抱える中、法律家の先生方には、理路整然と政治改革の必要性を説かれ、また、同じ改革派議員には、与野党を超えてその勢力の結集に奔走されました。
入道では腐敗選挙を払拭できないと考えた先生は、イギリスの選挙制度を適用され、連選制を厳格に適用する選挙腐敗防止法の成立に尽力されました。一連の選挙制度改革は、カネの追及し続けた先生の、凄まじいまでの執念と首尾一貫した行動が成し得た偉業でありました。
マックス・ウェーバーが指摘したように、情熱と判断力を駆使しながら、堅い板にゆつと穴をあけていく作業が政治家とすれば、まさに政治改革に真っ向から挑まれた先生の人生が、激動の時代に直面するわが国が求めた、理想の政治家の生き方そのものだったのではなかったでしょうか。
今日の選挙では、かつてのように地盤・看板・砲がなくとも、高い志さえあれば多様な若い人材が、公募に挑戦できる時代になりました。
令和という新時代が幕開けた今、保岡先生が常々期待されていたように、大きな意欲改革を地道に成し遂げる、本当の意味での政治家が一人でも多く誕生することを、私も先生とともに願っています。残されたわれわれは先生の「遺志を精一杯引き継いでまいります。保岡先生、長い間のご活躍、本当にありがとうございました。どうか安らかに眠りください。」
令和元年五月二十日
「保岡興治送る会」実行委員長
自由民主党幹事長
一階俊博



二階 俊博

実行委員長・自由民主党幹事長